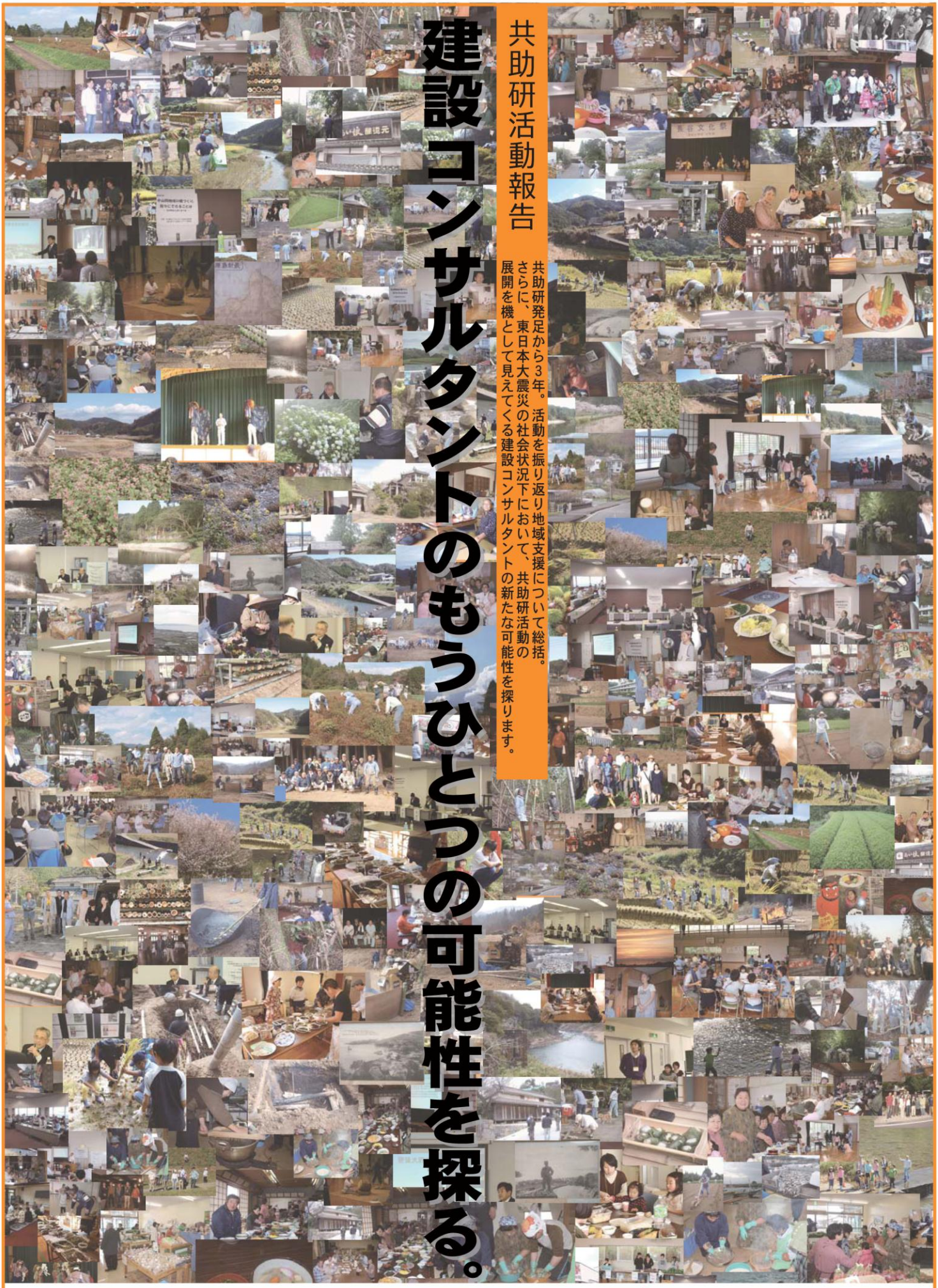


建設コンサルタントのもうひとつの可能性を探る。

共助研活動報告

共助研発足から3年。活動を振り返り地域支援について総括。
さらに、東日本大震災の社会状況下において、共助研活動の
展開を機として見えてくる建設コンサルタントの新たな可能性を探ります。

「地域づくりの支援活動」に関する情報提供サイト
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

共助研・活動報告会に関する報告書

～ごあいさつ～

平素は、（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部の活動に対して、格別のご高配、ご協力を賜り、厚くお礼申しあげます。

私ども「九州 郷づくり共助ネットワーク研究会」（略称、「共助研」）は、平成 18 年度の「夢アイデア交流会」に寄せられた、“九州の農山漁村部と都市部とを結ぶ共助のネットワークづくり”という夢アイデアの実現に向けて、平成 20 年 11 月に同支部夢アイデア部会に所属する組織として発足いたしました。

手探りで始めたこの活動も、既に４年目となりました。この間に、人口減少と高齢化が進む中山間地域をフィールドとした地域支援活動や、都市と農村の交流学習による着地型観光地づくりへの支援、さらに GIS を活用した地域情報の収集・発信、里地里山保全活用を通して人と自然のかかわりを再生する技術開発など、多岐にわたる活動を重ねてきましたが、未だボランティア活動としての色合いが強い状況であることは否めません。

「共助研」が本来目指すべき活動目的は、これからの時代において建設コンサルタントが果たすべき新たな社会的役割や位置付けなどを検討・確認することでもあると考えています。おりしも、近年「新しい公共」と言われる組織や活動がその社会的役割を増大させ、地域の独自性を生かした地域自立活動の展開が広く進むなか、私ども「共助研」の活動も、この展開を支える社会的な仕組みとして体系化されていくことが必要だと、強く感じているところです。

そこで今回、これまでの「共助研」３年間の活動成果をふりかえりながら、新たな社会貢献のスタイルとしての**建設コンサルタントのもう一つ可能性**を、皆様と一緒に考えていく場として当活動報告会を開催しました。活動報告会当日は、平日夕方という時間帯の開催ながら 100 名を超えるご参加を得て、当会活動に関する多くのご理解をいただくとともに、これからの建設コンサルタントの方向性を共に検討する貴重な場とすることができました。

この活動報告会の内容につきまして、ここにその要約を報告させていただきます。

この報告書が、建設コンサルタントとして従事される多くの皆様にとって、その新たな可能性を展望するための一助となれば幸いです。

あわせて、中山間地域等において地域維持・地域活性化活動を主導しておられる行政の方々、並びに多くの活動家の方々にも当報告書をご確認いただき、私ども「共助研」の活動につきまして引き続きご指導・ご意見をいただけますと幸いです。

平成 24 年８月

九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

会長　針貝武紀

～目　次～

●開会あいさつ　針貝　武紀　（共助研会長）・・・・　１

第１部　共助研活動報告

○３年間の活動総括　森脇　亨　（共助研）・・・・・・　４

○柴北川Ｐの活動と成果　木寺　佐和記（共助研）・・・・・・　５

○雲仙Ｐの活動と成果　岑　耕介　（共助研）・・・・・・　６

○ＧＩＳ活用による地域支援の取り組み　山本　慎太郎（共助研）・・・・・・　７

○里山保全に関する地域支援の取り組み　波多野　健志（共助研）・・・・・・　８

第２部　講演・現地報告

○震災被災地復興現地報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

～ 大槌町の復興まちづくりに携わって～

平井　一男　（共助研）

○講演　「あるく、みる、きく」 そして　創る・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

～ 提案から、地域と暮らしのきもいりどんへ～

安藤　周治　（NPO 法人ひろしまね）

第３部　パネルディスカッション

○「建設コンサルタントのもうひとつの可能性」・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

コーディネーター　小川　全夫　（熊本学園大学）

パネラー　安藤　周治　（NPO 法人ひろしまね）

和泉　大作　（建コン協会　技術部会）

平野　巖　（建コン協会　夢アイデア部会）

波木　健一　（共助研）

●参加者アンケートのまとめ　・・・・・・・・・・３５

●　開会あいさつ（共助研会長　針貝武紀）

共助研の活動報告会のご案内をいたしましたところ、多数、多彩な方々のご参加をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

四年目に入った活動報告会では、共助研の活動報告、お二人からのご講演、その後パネルディスカッションと進んでまいります。

お二人については私から紹介するまでもないのですが、安藤さんとのご縁は、中国地域で「中国地域づくり交流会」が発足し、交流会で「道の駅」が発案されたころにいただいておりますし、中国地域の過疎問題に生涯を一筋に貫いて歩んでこられたところからの貴重なお話を拝聴させていただけるものと思います。

また、平井さんからは、岩手県での震災後の街で何を感じておられるか、現地の方々の苦しみの中で模索されている、新しい生き方、そういったことをお伺いできるのではないかと期待しています。

さて、今回は、共助研の活動を踏まえ、建設コンサルタントのもう一つの可能性を探ることがテーマです。従前からご指導を賜っております、小川先生をコーディネーターに、和泉さん、平野さん、安藤さん、建設的なご意見をお願いしたいと思います。

建設という言葉は、調査、計画、設計、といった従来の土木工学的な意味があろうと思いますが、加えて、国土建設、ひいては国づくり、といった意味、「国づくりコンサルタント」――「地域づくりコンサルタント」でもかまいませんが――、といったところにまで解釈を広げることができるのか、そこにカギがあるのではないか、と秘かに期待しています。

これからは、多彩な、多様な専門家が横に連携することが大切ですが、そのような顔ぶれの方々にご参集いただいていること自体が、その可能性を暗示しているような気がしています。

共助研はプロボノとして何を担えるか、役割は何か？　その先に、「建設コンサルタントのもう一つの可能性」が見えてくるように思っています。

今日は、全員参加の討論会、といった意義あるダイアログが展開されることを、そして、実りある報告会になりますよう祈念してご挨拶とさせていただきます。

第１部　共助研活動報告

① ３年間の活動総括　（共助研　森脇　亨）

② 柴北川プロジェクトの活動と成果　（共助研　木寺　佐和記）

③ 雲仙プロジェクトの活動と成果　（共助研　岑　耕介）

④ ＧＩＳ活用による地域支援の取り組み（共助研　山本　慎太郎）

⑤ 里山保全に関する地域支援の取り組み（共助研　波多野　健志）

①　３年間の活動総括（共助研　森脇亨）

皆さんこんにちは、共助研の森脇です。

これまで三年間の活動総括で進めさせて頂きます。まず、共助研の成り立ちです。

我々の社会には、様々な自然災害から生命・財産を守る、エネルギー問題を始めとして循環型社会を構築するという多くの課題が蓄積されています。建設コンサルタンツ協会では、地域のまちづくりに寄与したい、失われつつある夢を取り戻したい、を原点として、平成 14 年から「夢アイデアでまちが変わる事でまちを元気にしていく」をテーマに、「夢アイデアプロジェクト」を始めました。今年で 10 回目を迎え、これまでに約 500 近い提案が寄せられました。

第４回「夢アイデア交流会」で「人口が減る時代の新しいまちのかたち」という提案が発表されました。少子高齢化を、美しい日本が新しい国の形を世界に示すチャンスと捉えたい、農山漁村を対象に自助公助に加えて共に助け合う郷土ネットワークづくりという概念で、世代各層の変化を視野に入れた新しいまちの形をつくる、という提案でした。

都市住民が地域に入り、共に考え行動をすることで、新しい地域づくりを目指すという提案です。

この提案に共鳴し、建設コンサルタンツ協会がもう少し自主的に表に出て活動を行おうという発想もあり、平成 19 年 8 月に共助研の準備会を設立して、島根県、広島県の中山間地域に視察に行きました。

本日の講演者の広島県作木村の安藤さん、NPO 法人ひろしまねの小田さん、島根県中山間地域研究センターの藤山さん達の話を伺いました。

そこでは、住民と行政の中間で支援する「もう一つの役場」の活動、第三者のエキスパートを抱えた集落支援センターの仕組みづくり、郷モデルの構築による戦略的な地域づくりなどが進められていました。コンサルタント、技術者に対する期待としては、共に汗を流すシンク＆Do タンクが求められ、実際に行動することの大切さを教わりました。

１年間の準備会を経て、平成 20 年 11 月に共助研は設立されました。

九州内の農山漁村を主体とする地域での共助ネットワークづくりに向け、都市部と農山漁村部、農山漁村相互の共助のあり方、その実現に向けて、諸活動を行う事を目的としています。地域住民、行政、企業、ＮＰＯ等の間に入って、相互を結びづけるという役目を担うという考え方です。

共助研は現在、建設コンサルタンツ協会九州支部の一部に属していますが、我々建設コンサルタント技術者だけでは発想が足りず、活動範囲も限定されてしまいますので、行政の方、研究者の方、地域活動家の方などを賛同会員として含めて、共助研という組織を構成しています。現在、協会会員 20 名、賛同会員で 13 名の合計 33 名で活動を進めています。

様々な繋がりの再構築による共助のネットワークづくりという活動理念をもとに、これらの目標達成の為に、地域支援活動の実施等による「結ぶ活動」、地域支援活動の意義の分析・広報等の「伝える活動」、地域課題解決のためのビジネスの模索としての「拓く活動」などを柱に進めております。

平成 21 年当初からの活動では、本日、コーディネーターをして頂く小川先生による地域支援活動の勉強会や、柴北川プロジェクト、雲仙プロジェクト、ＧＩＳ研究、里山保全技術研究等の活動を進めており、続いてこの４つのプロジェクトについて各担当者から説明をさせて頂きます。

②　柴北川プロジェクトの活動と成果（共助研　木寺佐和記）

共助研メンバーの木寺です。柴北川プロジェクトについて、報告します。

場所は、大分県豊後大野市犬飼町の長谷地区ですが、なぜ地元とこういう繋がりが出来たか、全ては夢アイデア事業から始まったということです。

「柴北川を愛する会」が平成 18 年に設立されていますが、同じ年の第４回夢アイデア事業で「人口が減る時代の新しいまちのかたち」が入選作となり共助研準備会が設立され、平成 20 年に共助研が発足しています。

平成 21 年 5 月に、大野川流域懇談会が大分版「夢アイデア」コンテストを行いました。その時に「柴北川を愛する会」の渡邊事務局長が活動を発表され、それを聞いて“何か一緒にやる事はありませんか”と働きかけて具体的な活動が始まりました。

４つぐらいの活動をしています。先ず山桜資源調査で、これが協働の第１歩になりました。その調査結果をウェブ上で公開したり、柴北川沿いに視点場を整備したりしました。

また、同時に長谷小学校が廃校になるという事で、共助研がワークショップを企画・運営し、地元の方の意見として、小学校廃校の跡地をどう活用するか、長谷地区の今後の姿はどうあるべきか、などをまとめました。最近でも、世代別のグループヒアリングとかを継続して行っています。

調査だけでは面白くないので、「愛する会」の方から、田植えとか稲刈りを一緒にやりませんかとかの呼びかけがあり、農業体験を通しての都市との交流も始めました。

さらに山桜周りの竹林整備として、竹林伐採から竹炭作り、竹の子栽培の学習へと発展しています。

これらの活動の背景としては、最初に林野庁の山村再生プランに応募して資金的援助を受けました。現在は豊後大野市の地域チャレンジ事業から援助をいただいています。

活動を通しての我々の感想ですが、外部から地域へ入り込む際のマナーとか、自然、人、伝統文化、直接住民の方と接する機会、郷土料理などなど、都市部にいて通常に働いているだけでは決して得られないパワーをいただいています。

それと後半のパネルディスカッションでも話題になると思いますが、３年間過ぎたこのプロジェクトを経済的に自立していけるように、農産品の開発やネット販売の促進についても引き続き検討しようと考えています。また、地域にまだ残っている伝統技術とか、昔の遊びを伝える様な機会を持ってみる、そういうこともプロジェクトとして話し合っています。

それから、本日のテーマである「建設コンサルタントの新しい可能性」ですが、この活動は、コンサルタント技術者としての経験・知見・意欲・総合力を高める機会となっており、新しい可能性を確かめるために十分な場となっています。さらに、新しい時代ニーズに対する企画立案者としての建設コンサルタントが求められていますが、直接、社会の問題点と向き合い、提案の必要性・中身を考えさせられる場となっています。

それから、我々は組織化された「プロボノ」として社会貢献が出来ていると思います。現在は九州地区独自の活動ですが、全国にも展開できるのではないかと思います。

この様な活動が、業務として社会的に認められるという可能性はどうか。これは、例えば新しい公共そのものなのか、新しい公共の中間支援組織なのか、本当の新業務としての確立なのか。

皆様のご意見も是非お願いしたいと思います。

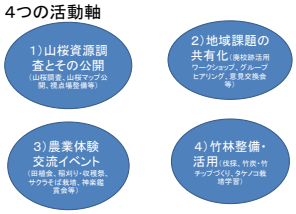
1. 柴北川プロジェクトの切っ掛けと経緯

すべては「夢アイデア活動」から始まった？

年度	柴北川を愛する会	建コン九州・夢アイデア・共助研
H.14～H.16	・「柴北川源流の碑」建立祭（H.16）	・第1回夢アイデア募集（H.14）
H.17	・発起人会設立（10名）	
H.18	・「柴北川を愛する会」設立総会（94名）	・「人口が減る時代の新しいまちのかたち」が応募（第4回佳作作品）
H.19		・共助研準備会の設立（8月）
H.20		・「島根県中山間地域研究センター」他視察（7月） ・「九州郷づくり共助ネットワーク研究会」発足（10月）
H.21	・夢アイデアコンテストin大分（5月） ・山村再生プラン応募（7月末） ・共助研との交流決定（9月） ・第1、2、3回山桜調査（11,12,1月） ・第1、2回ワークショップ（11,12月） ・視点場整備	・夢アイデアコンテストin大分（5月） ・山村再生プラン応募（7月末） ・第1、2、3回山桜調査（11,12,1月） ・第1、2回ワークショップ ・視点場整備
H.22	・第1回合同田植会（6月）、第1回稲刈り収穫祭（10月）、山桜調査（11月）、竹林伐採（2月）	・同左
H.23	・第2回合同田植会（6月）、第2回稲刈り収穫祭（10月）、竹林整備・竹活用（11月他）	・同左
H.24	・跡地検討会・グループヒアリング（4月）、第3回合同田植会・意見交換会（6月）	・共助研・活動報告会（7月）

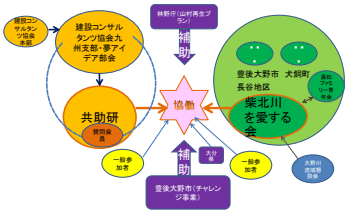
2. 柴北川プロジェクトの活動概要

・4つの活動軸



3）農業体験交流イベント

4. 協働の関係図



5. 活　動　成　果

① 都市住民を受け入れたことで、当たり前の景色（山桜、農山村風景等）に価値があることを発見し、地域を見直す動きが出てきました（地域のご意見より）。

② 引っ込み思案であった方も、積極的に参加するようになりました（地域のご意見より）。

③ 農業体験、竹林整備等、協働で汗をかくことによって、互いの信頼感が深まってきています（地域・共助研の感想より）。

④ 外部から地域へ入り込む際のマナー、自然・人の素晴らしさ、伝統文化、直接住民の方と接する機会、郷土料理等々、都市部・通常業務では得にくい経験・感動・達成感を頂いています（共助研の感想より）。

⑤ 柴北川を愛する会の活動も参加者が増えていく、活動内容も広がる等の発展が図られています。

6. 今後の方向性と課題

1）プロジェクトの方向性

①経済的成果も出るような活動を試みる（特産品のネット販売等）

②地域の伝統技術や昔の遊びを伝承する機会をつくる、・・・

2）建設コンサルタントとしての新しい可能性を探る

①技術者としての経験・知見・意欲・総合力を高める場・機会としての活用（問題発見・定義者へ、企画立案者へ、・・・）

②組織化されたプロボノとしての社会貢献（各支部でも？）

③このような活動が業務として社会的に認められる可能性模索（新しい公共、新しい公共の中間支援組織、PPP、新領域として確立、・・・？）

③　雲仙プロジェクトの活動と成果（共助研　岑耕介）

共助研の賛同会員の岑耕介です。雲仙プロジェクトの説明をさせて頂きます。

雲仙プロジェクトの対象は、平成 11 年に 7 つの町が合併してできた雲仙市です。

その中の６町を対象として、「生活文化人から学ぶ」というテーマで、歴史学習、産品開発事業事例見学、農産物加工体験等のまち歩き、事業者に対するヒアリングを行いました。

活動目的として、地域の魅力発見、先人理念の状況把握、及び地域のキーマンとの人脈・交流づくり等を行って、雲仙市と都市との交流づくりによる地域おこしの可能性を探ることとし、実施しました。

なお、このプロジェクトは、雲仙市内の地域支援活動団体チームギア（代表は松本由利さん）による平成 23 年度の雲仙市補助事業「雲仙の千の物語事業」を支援するかたちで実施しました。

「雲仙の千の物語事業」とは、自らの専門性をもって社会貢献を目指す都市住民が、農村の住民と共に、農村の人から農村の生活文化を学び、農村の資源を活かした学習観光商品等を企画する。その企画を農村住民が商品化してモニター・セミナーを実施し、学習観光商品などを企画する組織づくりを行って経済活動に繋げていこうという事業です。

プロジェクトでは、我々と会員と地域の住民が、瑞穂町、小浜町、国見町、吾妻町、愛野町、南串山町、と回り、参加者個々がチェックシートを用いて各地域の資源評価を実施しました。評価点が 80 点以上となったのは６ヶ所ありましたが、地域体験ができる場所が高い評価となっており、都会の人達にとっては非日常の良い経験になったのではないかということです。

これらについて先程の柴北川プロジェクトと違う点は、平成 23 年度の雲仙市市民事業を、地元のチームギアと協同で、さらに我々共助研の賛同会員も多く参加して、雲仙市を訪問、活動させて頂いたということです。

プロジェクトの効果としては、地域の魅力の確認ができたこと、及び思わぬ展開が進んだことです。雲仙地域の具体的な魅力を、都市住民に向けて事業化することで、地域の活性化に繋げようとしている大きな取り組みがあるということです。

歴史的資源、自然的資源が豊富である事、地元の方々が当たり前の事をしている事が、都市住民には既に失った貴重な資源であり、本地域の魅力である事です。共助研メンバーの商品開発や地域通貨等の専門家の方々との連携プロジェクトの実績づくりともなりました。

これまでも温泉地域として有名な雲仙地域ですが、これらの豊富な資源を活用する事で、持続的な活力ある地域づくりが可能であると考えられるものの、都市住民が求めているニーズとのマッチング、情報発信の仕方、事業化プロセスの対応、新しい建設コンサルタントビジネス領域の発見、以上の４つが課題として出されました。

以上簡単ですが、報告とさせて頂きます。

1. プロジェクトの概要

（平成23年より開始）

- 対象：雲仙市内の瑞穂町、小浜町、国見町、吾妻町、愛野町、及び南串山町の6地区
- テーマ：「生活文化人から学ぶ」
- 活動項目：歴史学習・産品開発事例見学・農産物加工体験等のまち歩きや事業者ヒアリング。
- 目的：地域の魅力発見、先進事例の状況把握、および地域のキーマンとの人脈づくり等をおこない、雲仙地域と都市との交流づくりによる地域おこしの可能性を探ることを目的として実施した

なお、本プロジェクトは、雲仙千々石で地域支援活動を実践しているチームギア（代表：松本氏）の平成23年度受託事業「雲仙　千の物語」の事業支援をおこなったものです。

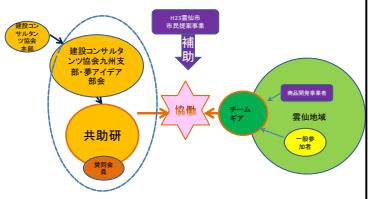
雲仙の千の物語とは

自らの専門性をもって社会貢献を目指す都市住民が
農村の住民と共に　農村の人から
農村の生活文化などを学び
▼
農村の資源を生かした学習観光商品などを都市住民が企画
▼
農村住民が商品化してモニターセミナーを実施
▼
都市と農村の交流学習商品などを企画する組織をつくり
共に専門性を高めながら経済活動につなげて行こう
というものです

平成23年度　雲仙千の物語実行委員会　活動報告PPｴより（チームギア：松本氏作成）

平成23年度　雲仙千の物語実行委員会　活動報告PPｴより（チームギア：松本氏作成）

2. 協働の関係図



3. プロジェクトの効果

【地域の魅力の確認と今後の展開】

- 雲仙地域の具体的な魅力を都市市民へむけて事業化することで、地域の活性化につなげようとしている多くの取り組みがあること
- 歴史的資源や自然的資源が豊富であること
- 地元の方々が当たり前のことと思っているものが、都市市民がすでに失った貴重な資源であり、本地域の魅力であること
- 共助研メンバーの商品開発や地域通貨等の専門家の方々との連携プロジェクトの実績づくりとなった

4. プロジェクトを通しての課題

これまで温泉地域として有名な雲仙地域において、これらの豊富な資源を活用することで、持続的な活力ある地域づくりが可能であると考えられますが、次の課題があるとの指摘もだされました。

- 都市市民が求めているニーズとのマッチング
- 情報発信の仕方
- 事業化への諸プロセスへの対応
- 新しい建設コンサルタントビジネス領域への発展

④　ＧＩＳ活用による地域支援の取り組み（共助研　山本慎太郎）

ＧＩＳ活用を担当しています共助研会員の山本です。

ＧＩＳ活用による地域支援の取組と成果について報告します。

この活動の目的ですが、地域からの情報発信、情報共有、地域資源等の分析等でＧＩＳが有効な手段であるということから、会発足当初よりＧＩＳの活用の検討を進めてきました。

平成 21 年度に、島根県の中山間地域研究センターに行きまして、藤山科長にヒアリングを行いました。続いて 11 月頃から、柴北川プロジェクトの「山桜調査」において、山桜一本一本の位置をＧＰＳで計測し、平成 22 年度にその調査結果をグーグルマップで公開し、ＧＩＳによる情報発信試行の取組をしています。

また、夏頃に集落支援でのＧＩＳ活用に関する自治体アンケートを実施しました。その後は、少し活動が停滞をしていますが、引き続き柴北川での「山桜調査」等の整理を行っているという状況です。

ＧＩＳ活用に関する先進事例調査として、先程ご説明しました島根県の中山間地域研究センターでのヒアリングを実施しています。

この中山間地域研究センターでは、ＧＩＳを集落支援等に活かす取り組みをしています。上の例が、細かい所で、農地所有者の年齢別の分布状況です。下の例はマクロな話しで、中国地方全体の高齢化の分布状況とか、集落別の環境容量、ＣＯ2 の吸収量等を集落レベルで把握していこうという取り組みです。

このヒアリングにおいては、主に４つぐらい指摘がありました。

先程のミクロな視点で取り組むべきなのか、マクロな視点で入るべきなのか。その辺は、細かい所から入って行って、最終的にマクロへの展開をすることが望ましいとか、使用するソフトとか、防災から入って行く事が入り易いとかなどの、指摘をいただきました。

これは、実際に柴北川プロジェクトの一環で、グーグルマップで「山桜調査」結果を共有・公開したものです。これはＧＰＳで計って、写真を撮ってきたものを、その樹木の状況等として整理して、グーグルマップ上に公開しています。これに合わせて、「山桜」を観賞する視点場も整理しており、そちらの状況や内容についても紹介をしています。

これが自治体アンケート調査結果で、ＧＩＳ部分を抜粋したものです。全体的に、集落の実態把握の為に４分の１強がＧＩＳ活用に前向きに考えています。また、実際に活用している自治体からは、困っている事として費用面とか管理面で人が足りないとかいう意見が挙がっています。

ＧＩＳ活用の実績は少ない段階ですが、実施に特殊なソフトウェアが必要とか、ある程度のスキルが必要なことなどがネックとなって、なかなか進んでいないというのが現状です。

ＧＩＳを単に分析するツールとしてだけでなく、スマートフォンとかの情報端末を利用して、地域でコミュニケーションが出来る様な双方向の情報共有を行うなどの、活用の可能性を模索していきたいと考えています。

今後の進め方としては、雲仙とか柴北川とかの共助研フィールドの取り組みを支援することとあわせて、学術研究機関等と連携をして地域分析をやっていく、こういう２本柱で進めていきたいと思っています。ただ、現在、担当する会員が少ないので、若手技術者の方をはじめとして、興味ある方にはぜひ参加して頂きたいと思います。

最近では、フリーソフトとかネット上で簡単に情報等を取ることが出来ます。簡単に防災マップとか、地域資源の整理が出来ると思いますので、活用して今後を進めて行きたいと考えています。

GIS活用検討の取り組み
～活動履歴～

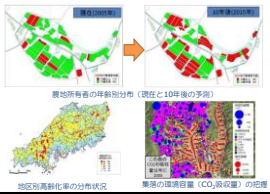
◆平成21年度
6.28～29　：島根県中山間地域研究センター藤山科長へヒアリング（弥栄、浜田）
11～4月　：柴北川P山桜調査結果の整理
通年　　：GIS活用策の検討

◆平成22年度
5月　：柴北川P山桜調査結果のGoogleMap公開（1回目）
8～9月　：集落支援に関する自治体職員アンケート調査実施（GIS関連）
通年　　：地域分析・GIS活用事例の調査、GISツールの調査

◆平成23年度
4～5月　：柴北川P山桜開花時調査結果の整理、GoogleMap公開（2回目）
通年　　：GISツールの試用、学術研究機関との連携模索

GIS活用検討の取り組み
～先進事例の調査～

島根県中山間地域研究センターではGISを活用した集落支援や集落分析など様々な取組を行っており、取り組みの参考にヒアリングを実施。



GIS活用検討の取り組み
～ヒアリング結果（抜粋）～

◆地域に役立つシステムとしてはミクロ的視点が重要であり、ミクロからマクロへの展開が望ましい。

◆ ソフトは安価なものを中心に考えて利活用を推進し、分析の際に特殊なものをと使い分けて利用するのが望ましい。

◆住民として捉えやすい「防災」の観点から、最終的には「政策評価」とステップアップしていくのが望ましい。

◆「パートナー自治体」等地域を絞って構築していくことが望ましい。

GIS活用検討の取り組み
～GoogleMapでの山桜調査結果等の共有・公開～

柴北川プロジェクトでの山桜調査－現地にてGPS計測した山桜や整備した視点場等の情報を共助研ホームページにて紹介

GIS活用検討の取り組み
～自治体アンケート調査結果（GIS部分抜粋）～

集落の実態把握のために1／4強がGIS活用に前向きであった。
また、活用する上で困っていることでは「費用面」「管理面」があげられた。

活動成果及び今後の課題等

◆実施に特殊なソフトウェアやある程度のスキルが必要となるため、なかなか進展していないのが現状。

◆ GISを単に分析ツールとして使用するだけではなく、スマートフォンなどを利用した地域のコミュニケーションツール（双方向の情報共有）としての活用の可能性を模索する。

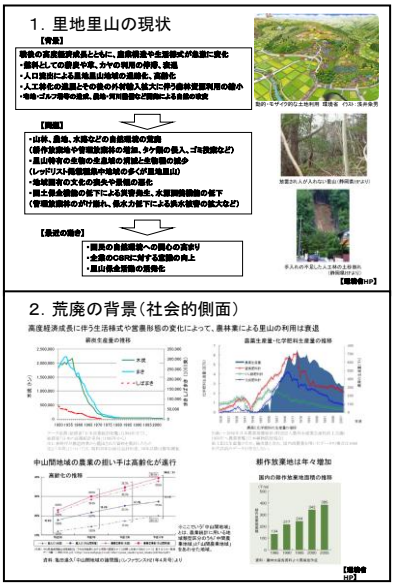
◆引き続き、共助研フィールドの取組支援と学術研究機関との連携による地域分析の2本柱で進めていく。

若手技術者の方々の参加をお待ちしてます！

⑤　里山保全に関する地域支援の取り組み（共助研　波多野健志）

続いて、里山保全に関する地域支援の取り組みと成果を報告します。本日はリーダーの濱田の代理として波多野が発表します。

ご存知のように、里地里山は集落、ため池、人口林、自然林などで総体的に構成されている環境で、都市部と奥山自然地域の中間部に位置しています。



里地里山は、長い歴史の中で、農林での様々な人間の働きかけを通じて維持されていましたが、エネルギー源の変化、それに伴う生活様式の変化によって、劇的な変化を遂げている状況です。

それで、問題点としては、山林、治水路等の自然環境の荒廃、里山特有の生物の生息域の消滅、生物種の減少、これはそのまま絶滅危惧種増加に繋がる現象です。それから、地域固有の文化の喪失や景観の悪化、国土の保全機能の低下による災害の発生、水源としての機能の低下などが問題点として挙がっています。

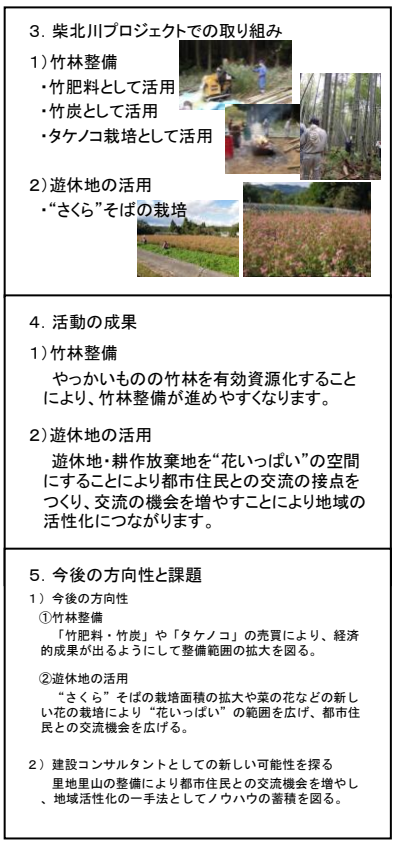
最近の動きとして国民の自然環境保全意識の高まりが挙げられます。また、企業のＣＳＲとしても里地里山の保全活動に動き出し、最近は活発化しています。

荒廃している社会的背景を、昭和 30 年代以降の生活様式や営農形態の変化のグラフで表しています。

左上の図は、木炭やまき等の変化で、昭和 30 年頃から急激に減少しています。これが里山の荒廃に繋がっていると考えられます。

また、左下の図は、中山間地域の農業従事者の推移で、高齢化が深刻な状況になっています。それに伴いって、右下の図では、耕作放棄地がぐんぐんと右肩上がりで増加しています。

里山保全に関する共助研の取り組みとしては、柴北川プロジェクトを通じて、竹林整備、遊休地の活用、この２つを大きな柱として行ってきています。



竹林整備としては、伐採した竹を竹肥料として活用するもの、伐採したものを竹炭として活用するもの。

伐採したことによって、竹藪が竹林に変わるので、竹の子が活性化します。それで竹の子栽培を始めようという動きがあります。それから竹炭ですが、東日本大震災以降から取り組んでおり、東北の方に竹炭を送って、消臭や乾燥対策で活用してもらうこととしています。

また、遊休地の活用として、桜そば（高嶺ルビー品種）の栽培があります。普通のそばと違い、桜色の花をつけます。柴北川プロジェクトでは地域の花いっぱい運動をやっていまして、先程のＧＩＳ調査の報告にもありましたが、それによって山桜につながる地域のイメージをつくり、それを都市との交流の題材の１つにしたいと考えています。

活動の成果としては、厄介者の竹林整備を有効活用することにより、竹林整備が進み易くなる。それから遊休地、耕作放棄地を花いっぱいの場として活用することで、都市住民との交流範囲が広がり、都市との交流の機会が増えて地域の活性化に繋がっていくと考えています。

今後の方向性と課題ですが、ひとつは竹林整備を通じて竹肥料、竹炭、竹の子を商品化することで、地域への収入源の拡大を図って行きたい。それから遊休地の活用については、桜そばを植えることで花いっぱいの範囲を広げるとともに、そば等を現地で販売する事で都市住民との交流機会を広げて行きたいと考えています。

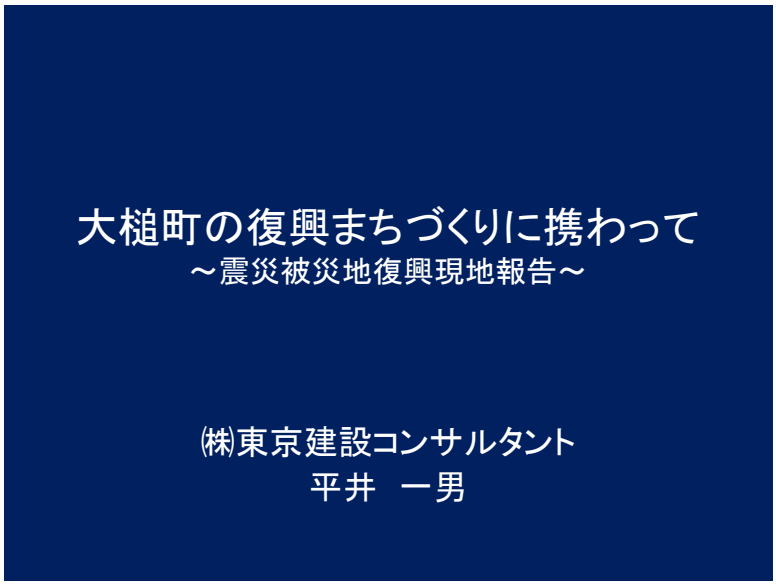
また、建設コンサルタントとしての新しい可能性を探るという事では、里地里山の整備により都市住民と交流を増やし、地域活性化の手法としてそのノウハウの蓄積を図って行こうと思っています。

第２部　講演・現地報告（１）

震災被災地復興現地報告

～ 大槌町の復興まちづくりに携わって～

共助研　　平井　一男



（１）　震災被災地復興現地報告　～ 大槌町の復興まちづくりに携わって～（共助研　平井一男）

東京建設コンサルタントの平井と申します。よろしくお願いいたします。

私も共助研のメンバーですが、今は、東北・岩手県の大槌町にいます。この機会を頂きまして、有難うございました。今日は、５つぐらいの内容についてお話したいと思います。

◆役場の立場で、また、住民として市街地の再生に携わる

私の立場ですが、ボランティアでなくて仕事として行っています。通常の建設コンサルタント業務でしたら、通って行くのですが、現場に詰めて仕事をしています。もう１つの視点としては、住んでいますので住民としての側面もあるという事です。

仕事の内容としては、主に市街地の再生です。大槌町の場合は、市街地の半分ぐらいが浸水でやられましたから、そこをもう一回整備する。人に住んで貰えるようにする。

私の関わり方としては、大槌町の復興まちづくりに、複数の建設コンサルタントの企業体の一員として携わっています。２３年度については国土交通省の直轄業務、２４年度現在は大槌町から受諾をして携わっています。

次に、常駐として役場の中に机を貰って仕事をしていますので、町民もやってきます。そういう方からは、ネームプレートは違いますが、役場の人と見られる事はあります。

実際の仕事としては、発注者と受注者の関係なので、役場の人からはいろいろなオーダーが入ります。当然、私の専門外の事もありまして、そういう所を設計チームとか検討チームに的確に伝えたり、あるいは指示をしたりという事です。飲食店の経験がある方はおわかりだと思いますが、「デシャップ」という感じで取次ぎをする立場になっています。立場は違うのですが、役場内にいるという事で、住民の方からの要望は分かり易いと感じています。

また、近隣住民としての立場で、自分の気持ちとしても早く復興を願っているという感情があります。

１－１. 受託者の一員としての立場

- 主に住宅・公共施設、市街地などの再整備に関する調査・計画
- 大槌町の復興まちづくりに、建設コンサルタント企業体の一員として携わる
  - 【平成23年度】－国土交通省発注の業務を受託した企業体の一員として業務を遂行（大槌町との契約関係は無し）
  - 【平成24年度】－大槌町発注の業務を受託した企業体の一員として業務を遂行

１－２. 役場常駐としての立場

◆ 一部の町民からは、役場職員と同じように見られる
◆ 役場職員（町民）とコンサルタントチームとを橋渡しする役目（デシャップ）

立場とは違うが・・・
◆ 町役場（町民）の要望・現状がつかみやすい

１－３. 近隣住民としての立場

◆ 復興を早く願う住民のような立場
◆ まちづくりに必要とされる、よそ者・ばか者・若者のうち「よそ者」
◆ 週末住民（？）

我々の仲間ですが・・・
◆ 社団法人の一員となり、町のまちづくりに関わる人も

まちづくりでは「よそ者・若者・ばか者」が必要だと言いますが、そういう意味では「よそ者」なのかなと思っています。

毎日いるのですが、平日は朝から晩まで仕事をしていますので、週末に町内を買物したり、観光したりと、体験はなるべくする様にしていて、そこは週末住民的な所もある。

余談ですが、大槌町に「おらが大槌、夢ひろば」という実際にまちづくりをやっている社団法人があるのですが、去年まで我々のチームに居たメンバーがそこに転籍して、現地に住みながらまちづくりに関わっているという事も実際起きています。

◆大槌町は陸中にある小都市で、急激な人口減少

続いて、大槌町の概要の一部を紹介します。

場所の確認と人口等とまちの様子の３つ程紹介します。

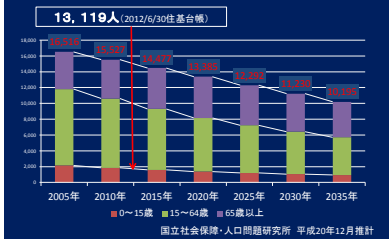
位置は岩手県の沿岸部、陸中になります。良く三陸という言葉は聞くと思いますが、三陸とは「陸前」「陸中」「陸奥」で、大槌は陸中にあります。大槌町全体は海から山まで長い所で、被災したのは平地部です。

人口は、2005 年時点で１万 6510 人。推計値ですが、2010 年は１万 5000 人で減りがちです。今現在は、１万 3000 人とさらに減っています。その減り方が急激で、推計値の 10 年くらい先にいってしまったような感じです。今も、転入より転出超過で、人口規模は１万数千人という状況です。

被災前の町の様子（町方地域）ですが、町の中心の御社地（おしゃじ）

２－１. 大槌町の位置

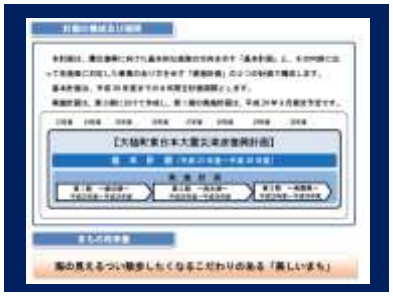
２－２. 大槌町の人口（推計）



では緑が多く池があり、小槌神社のお祭りもありました。これは被災前の図書館です。人口１万数千人ですから、町中のメインのストリートは道幅も片側１車線の広くない通りです。商店街も道路に面した昔ながらの商店街。水が豊富な所なので、町中に水路ですとかが多く見られる。

次に、町の様子を被災前と被災後で整理してみたのですが、町方地域の城山という高台から見た写真です。被災後は、高い建物以外は流されてしまった写真です。これは町中の通りの写真で、商店街ですが高い建物しか残っていない。大槌駅というＪＲの駅では、駅舎自体なくその裏の住宅とかもない。駅前の通りですが、こういう状態でした。

◆“海の見えるつい散歩がしたくなるこだわりのある美しい町”をつくる



次に、大槌町の復興計画についてです。こちらは、昨年 12 月に大槌町が「津波復興基本計画」を策定した時のものです。

町長の思いもあって、将来像として“海の見えるつい散歩がしたくなるこだわりのある美しい町”というのを掲げています。当時の被災地で、海の見える散歩がしたくなるという前向きな将来像を掲げたことは、結構、勇気のいることだったと思います。

起案・施策としては、当然ながら安心・安全の確保、暮らしの再建、地域経済の再興、教育環境の整備を挙げています。

重点プロジェクトとして、復興まちづくりプロジェクト、歴史・文化・芸術、国際海洋研究、美しい街なみ、スマートタウンなどが挙がっています。

◆地域住民の声を受けて、市街地復興のかたちを選択

この次に、被災地をどういうふうに再興しようかという所を、少しだけ紹介します。

こちらは大槌町の沿岸部の地図で、中心部はこの町方という地域です。この隣の地域が、赤浜、小枕、吉里吉里、浪板、内陸部に若干入りますが、沢山・大ケロ、桜木町・花輪田という地域があります。

町方地域の中心部については、殆ど被害を受けてしまったので、この市街地を再興するわけです。防潮堤ができても浸水してしまうこともあります。浸水しないように移動し範囲を狭くして市街地を再興する計画があります。元々居た人は、なるべく内陸部に移動したいという希望もあって、市街地については面積が半分くらいで再興しようとしています。

防潮堤も被災前より高いものをつくるのですが、基本的には逃げる事が肝心ですので、城山という高台に逃げる様な避難路を作るというのも重要な要素です。

これは、６月 30 日に住民説明会で使用した時の図面で、防災と主要街路という考え方で出しています。再建する市街地の範囲は元々の約半分、その中でメインの街路については残して、城山という高台に 200m間隔で避難道を設けるような動線を確保する。この避難道へは最長でも１００ｍで、登って避難場所にいけるような条件となっております。ちなみに、こちらの緑のエリアは大きな公園になっていますが、この奥には元々総合公園があり、その機能をこっちに移して逆に元の公園の所を住宅に変えようとしているという計画です。

安渡地域では、避難道の整備は基本的には一緒で、高台に逃げる為の道路を整備する。ここには漁港があって、早く復旧する。このグリーンのエリアは、防潮堤ができても浸水する恐れが高いので住宅を作らない。残った所は産業用地として考えていく。安全な所に住宅を建て、低地部には住まないという方針を出しているので、その他の土地利用をしなくてはいけない。ただ、産業用地がこれで埋まるかというと、埋まらないという現実があって大きな課題になっています。

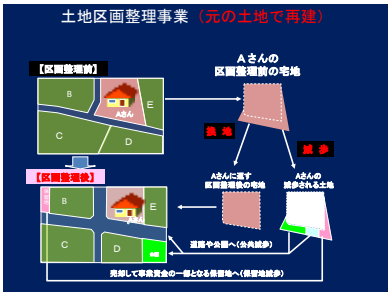
赤浜地域では、この地域の住民の意向で、防潮堤については被災前の高さで良い。その代わり、高台まで

逃げますよという選択をしています。

吉里吉里地域は、元々きれいな砂浜があって岩手県の内陸部から海水浴で遊びにくるような場所でした。砂浜の復活とあるのですが、地盤沈下で砂浜が流れてしまい砂浜を何とかして欲しい、という住民の強い意向もあって、基本計画に書いてあります。当然市街地の再興もありますが、ここは特長的です。

浪板地域、ここも砂浜の再生とありますが、ここの砂浜はサーフィンをする様な所でした。

◆現地再建か移転かで 2 つの市街地再生手法

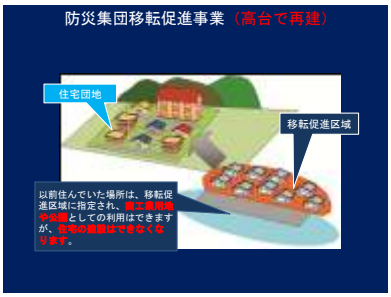


市街地再生の手法については、大きく２つ取り上げます。

１つは、土地区画整理事業をやる。区画整理事業をやる所については基本的に元の場所で再建をします。

もう１つは、防災集団移転促進事業。元の土地は浸水するリスクが高いという事で、住宅については高台に移動する。ただ商工業とか産業系の所は利用可能として移転対象としない。

ちなみに、町方地域でのスケジュール案です。



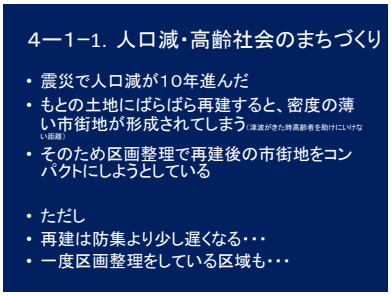
防災集団移転促進事業では、場所によって造成工事の時期がありますが、早い所で平成 26 年から住宅再建できるようにする。区画整理事業については、盛土をして地盤改良をする必要があるので、平成 27 年から住宅再建しよう、という事で計画をしています。

もう１つ災害復興住宅ですが、これは別に事業申請ということになります。区画整理とか防災集団事業については、住宅再生事業ということです。

先程の基本計画にあった砂浜の再生とかそういう所については、僕らの直接手を出していない所で、そういう所はこれからとなっています。何らかの所で進められる様にしたいと思います。

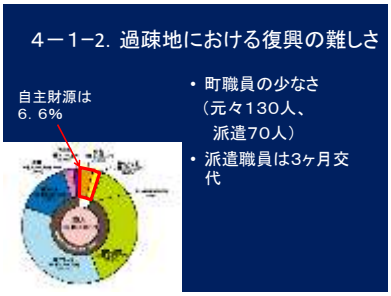
都市とか防災についても、業務の範疇外という事で遅れています。これからです。まだまだ、やる事がいっぱいあるなという事です。

◆災害時に対応できるコンパクトな市街地に



先ほど人口動向について触れましたが、震災で人口減小が 10 年くらい進んでスライドしてしまった。

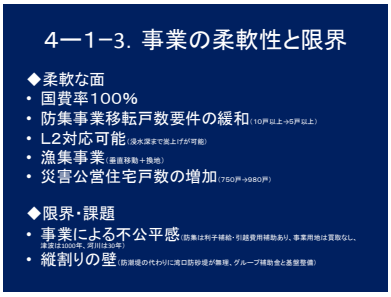
元の土地に再建していくと、密度の薄い市街地が出来てしまう。何が悪いかというと、津波が来た時に、高齢者を助けられる距離に人が居られない。その為には、区画整理事業を導入して市街地をコンパクトにしなければいけないと感じています。ただきれいに整備するというのもありますが、災害が起こった時に助け合える距離の間隔をもった市街地を作り直さないといけない。



防災集団移転事業と比べて工期が遅れる傾向があり、昔の被災したところも含まれているし、既に区画整理をやった所も含まれているという複雑な状況です。

過疎地における復興の難しさということでは、とにかくお金がありません。町の予算では再建における自主財源が 6.6%しかありません。24 年度の当初予算の歳入です。職員が少なくて、元々200 人弱なのが今は 130 人しかいません。現在は派遣職員が 70 人。但し、派遣職員は３ヶ月交代。６ヶ月の人もいますが３ヶ月毎に送別会を繰り返しています。

◆事業の柔軟性と限界



色々な事業をやっていて、今回はいろいろな特例を設けて貰いました。一番大きいのは、国費 100%で実施できるという所で、先程の町の自主財源６％という所ではだいぶ助かっている。

さらに、事業をやり易くする為に条件の緩和、基準を緩めてもらっています。紹介はしなかったのですが、漁集事業が使える。災害復興住宅とか、

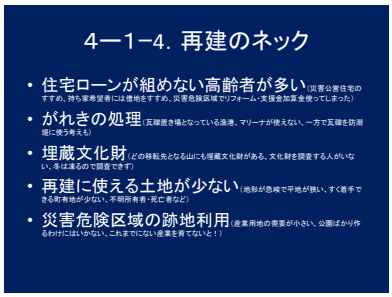
当初の数より増やして貰えるとか、柔軟に出来たという所です。

ただし、限界もあって事業による不公平感もあります。

例えば、防災集団移転では、住宅再建した時の利子補給とか引越し費用の補助する制度があるのに、区画整理事業ではない。事業の説明では、公平にやるんですよ、とするのですが、なかなか伝えにくい所です。

また、住宅については防災集団移転事業で移転して貰うのですが、事業用地についてはしない。事業用地は住民票がないのですが人は居るのです。そういう所からの苦情があります。

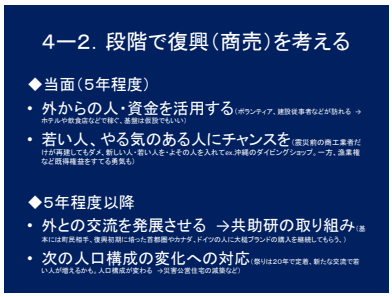
津波は1000年に1回ですが、河川はちょくちょく氾濫している。そちらは30年に1回、大きくても100年に1回で対応していて、内陸部に住んでいる人からは、河川改修を先にして欲しいという意見もあり、限界・課題だなと思います。



住宅については個人資産ですから、再建費用は被災者の方が負担するわけですが、住宅ローンは80歳まで組めますよとあってもなかなか難しい現実があります。

また、瓦礫の処理とか、埋蔵文化財等も結構あって、それが開発の支障になっていることもあります。大槌は平地が少ないということもあり、山を崩さないといけないという状況があります。その時も山には、埋蔵文化財があります。

また、災害危険区域の土地利用ということで、低い所は浸水のリスクが高いので高い所に移って下さい、という話をしますが、その低い所はどうするかというと、決まっていないというのが実情です。低い所を公園ばかりにするわけにはいかず、その辺の土地利用をどうするか検討を続けないといけない。仮に、被災前の産業だけを戻したとしても埋まりませんので、新しい産業を育てるとか、そういった事をしていかないといけない。



◆段階で復興を考える

今感じていることで、段階で考える。

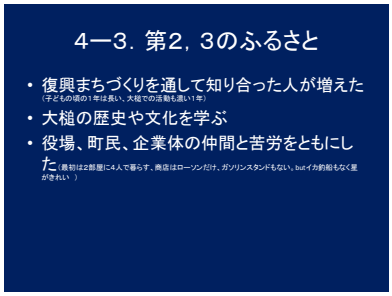
商売されていますが、当面の5年程度というのは復興交付金が使える期間です。

外からは、例えばボランティアの方、建設従事者の方がくるのですが、実際はホテルとかが今はない。被災してないわけですから、実際は、隣町の釜石市に泊まったり、宮古市に泊まったり、そこから通ったりしている。折角、お金を落とそうとしているのに、落とせる場所がない状況があります。当面は、そういった事を取り込める様な形でホテルや飲食店を作るとか、当面の対応について考える必要がある。

被災した方は、高齢者が多い。昔商売をされた方も高齢者が多いというのもあって、再建の意向が低い。若い人、受けられる人にチャンスをあげていかないといけない。

ハード的な整備がある程度完了していけば、次の段階として、今のうちから外との交流を作って行く、発展させていくこと、これは共助研の取り組みに通じる所があるのかなと思います。

共助研の場合は都市と農山魚村との交流ということですが、大槌町の場合、外国の方の支援も受け入れていますので、そういう所も今後繋げていく必要があると思います。



次の人口構成の変化への対応です。

若い人が入ってくるか、或いは、残った高齢者の人がもっと高齢化していくかによって状況が変わります。近い将来にまた見直す時期がくる、その時にもう1回考える時期がくる。先程、人口のグラフを見せましたが急激に減っています。今、10年後を描いた市街地を作っても、もう1回見直さなくてはいけない時期がくる可能性が高い。

◆復興のつちおと

これは感情的なものが大きいのですが、第2、第3のふる里に思えてきた。ちょっと感情が入りますので、苦労を共にするとかで知り合った人が増えてきたり、地域の事を学ぶことでそういう思いが出てきました。

最後に「復興のつちおと」と書きました。本来は工事が始まったという所でしょうが、復興に向けた数々の動きが始まっています。

町民の相談窓口を作りました。大槌町復興まちづくり情報プラザです。これはショッピングセンターの中に、気軽に相談ができる場所を作りました。個人的な相談ができる場所です。後ろの方に、復興の基本計画とかを飾ったりしています。見えない所にカウンターがあって、ここで相談できる。

組織としては、「おらが大槌夢広場」という組織が出来て、いろんな活動が始まっています。我々の仲間もここに転籍して活動しています。ここが、ボランティアを受け入れ等の窓口となったり、「復興食堂」の運営をしたりしています。こういう活動が上手くいくと、復興が早まるのかなと思います。

つい最近、6月30日に大槌ロックフェスティバルをやりました。大槌町であまり見かけない人とかがいて、違った風景が楽しめました。その時同時開催したのが「ウニまつり」です。ウニは無料でふるまわれたのですが、売っているものもウニご飯とか大繁盛でした。

これも6月23日ですが、世界の屋台村ということで、盛岡の留学生達が企画してそれぞれのお国柄の料理を振舞っていただきました。後は、外国の航空会社協賛によるコンサートもありました。

以上です。業務はまだ続いておりますので、引き続き頑張って行こうと思います。有難うございました。

5－1. 町民の相談窓口

5－2. まちづくり組織（おらが大槌）

5－3. イベント（ロックフェス）

現在の大槌町役場
（8/6に、仮設だった役場庁舎が、改修した元小学校校舎に移転）